

次世代につなぐ多彩な水環境教育活動

熊本県八代市の環境ボランティアグループ「次世代のためにがんばる会」

【はじめに】

熊本県八代市は、県南に位置し、県下第二の人口を有する田園工業都市。日本三大急流の一つ球磨川など豊かな水環境の中で、農業、工業、生活用水に地下水を利用する都市である。しかし、近年の生活様式の変化などの要因により、自然環境の汚染が進んでいる。そんな中、河川浄化を始めとした環境問題に取り組む活動が市民の意識を動かしてきた。

「次世代のためにがんばる会」は、「次世代の子ども達が健康で安全な生活を送れるように」との思いから地元河川の水質浄化や、環境問題の啓発活動に取り組んでいる。八代市環境基本計画の策定委員の有志たちが集まり、実際の活動を通してこれからの世代を担う子どもたちを育成し“身近な川や自然を守る人づくり”をしたい、との熱い思いから住民有志20人で平成13年にこの会が立ち上げられた。

発足当初は、理想論ばかりが出る中で”動かなければ何も始まらない”と、全国でも数か所でしか行われていなかった「かき殻」を使った河川浄化に乗り出した。その結果、水路の水が透明になった状態や水生生物が増えていく様子を実際に見て感動していく小学生の姿を見たとき水環境の保全に有効なこの活動の意義と手応えを感じた。

【かき殻による河川の浄化活動】

当初は、環境学習の出前授業をすることがメインの活動であったが、一緒にやっていた地元八代高専（現熊本高専）生物工学科の森田洋先生（現北九州市立大学教授）から牡蠣殻を使った水質浄化をしてみないか、との話を受け、翌年から「牡蠣殻を利用した河川水質浄化活動」を積極的に行うことになった。

初めは水質浄化活動から始められた活動は次第に川や浜辺のゴミが気になり、その原因は何だろうかと考えさせられるようになった。そのうちに人間の捨てたゴミが、川から海に流れ着いたものだとすることを子ども

たちに見せて啓発していかないといけないと考えるようになった。それをきっかけにして「河川浜辺の大掃除大会」が始められた。企画時に八代市の職員とゴミ拾いの話から、市とともに河川浜辺の大掃除会を行おうではないかということになった。そのときの活動は地方新聞社に取り上げられ、それを見た県事務所と一緒にやりたいと提案があり、その後「子どもゴミパトロール隊」に発展している。

かき殻による河川の浄化活動の第1回目は、平成14年。会員と高専の学生だけで市内の小さな水路に地元の漁協から提供されたかき殻を水川流域に沈めたことから始められた。その後、八代海河川の状況・水質調査などは、市環境課と地元の小学生で行われるようになった。現在では年間を通して、実施するイベントの数もかなり増え、元の小学生やPTA、地域住民も巻き込み、規模も参加人数も拡大化し、市内6校の高校生など、参加者が1,000人を超す全国的にも有名な活動になった。現在では、熊本県からの依頼で、ダム湖などでも活動が実施されている。活動は環境学習の場だけにとどまらず、世代や地域を超えた交流の場にもなり、継続的に追跡調査を行い、熊本高専と国土交通省八代河川国道事務所が協働でかき殻による水質浄化の活動を行っている。国、県、市役所との垣根を越えて合同で



かき殻まつり（牡蠣殻を使用した水質浄化活動）



氷川ダム湖で環境学習会をします
ダム湖周辺の水を持ち寄り、水質検査学習をします。他に植物観察会・野鳥観察会・間伐材で木工教室も行います。



かき殻まつり（牡蠣殻を使用した水質浄化活動）

行っている。今後は異なる河川流域での浄化の成果や比較検討などを行い河川流域全体への広がりが計画されている。

当会ではこの活動を球磨川支流の河川全体に広げていき水質の浄化とその成果から、ホタルの再育成に努めて「ホタルまつり」の開催を目指している。



子どもごみパトロール隊
球磨川河川敷のごみ調査とゴミ拾いを小学校の授業の中で行います。



八代海に面した河川や浜辺の掃除を、参加者各地域で行います
希望者は最終集合地点でその各地の水を持ち寄り、水質検査学習会と拾ったごみの分別学習会をします。

【河川から海岸の環境に】

河川の浄化と並行して行われている「こどもごみパトロール隊」は、国土交通省や保健所と共催で子ども達とともに川岸のごみ拾いを行い、ごみの現状を実際に子ども達に見せて、そのごみは大人が捨てたものか、子どもが捨てたものかなど真剣に考えさせる機会を与えたり、市環境課の指導のもとでごみの分別や水質調査、水辺の環境調査なども併せて行っている。「五感体験で実際に現地に足を運び、触れて、見て、考えて、何かを感じてほしい」との環境への意識は河川が流れつく、海へと広がっていった。現在では市内の児童や保護者などによる浜辺の大掃除大会が開催されている。同期日同時間に複数の八代海の浜辺でごみ拾いを行い、その種類や内容などを観察、分別、水質調査まで行う。それが、川や海にごみを捨てない人づくりと身近な水環境が私たち地域住民の生活に与える恩恵を学ぶ機会となっている。活動の中で「ふるさとエコすごろくカルタ」や「希少生物カルタ」を市内の高校・高専と作成し、共

同制作をするなかでの生きた学習から、健全な自然生態系の保持に対する意識を喚起することはもちろんだが、自分たちをとりまく自然界の変化やそれに対する自分たちの行動が与える影響の是非を自ら考えさせる力を養っていくことで次世代の指導者になってもらえることを目指している。

【資源循環型社会を目指した活動へ】

活動では市内の幼稚園や小学校で「ごみ問題の出前授業」も行っている。実際に生活している中で出るごみを22種類に分別させたり、会員が配役として出演し作成された「ごみ問題の現状」の映像を見せしている。

身近な大人が映画に出演することで子ども達に意識を持ってもらい、家庭（保護者）での環境問題に対する啓発を目的としている。「子ども達の反応は生き生きとして、活気のある授業になっている」と開催された学校の先生方は手ごたえを感じているとの意見が寄せられている。近年は生ごみ処理箱「もったいなか箱」の提案も始められている。

八代市のごみの中でも、水分を含んだ生ごみの比率はとても高い。その生ごみを堆肥化することにより、およそ40パーセントのごみの減量に繋がるという調査結果をもとに「もったいなか箱」を作り、黒土・もみ殻・おがくずを入れた箱（基材）を日当たりと風通しがよい場所に設置し、太陽と風とバクテリアで生ごみを分解している。この箱の利点は、毎日混ぜる必要もなくいつでも土に埋め込むだけでいいという手軽さ、ランニングコストもかからないなどがあげられる。ここに至るまでモニター調査やワークショップを行い、現在の形にたどり着いた。「もったいなかキャラバン隊」という会員制度を「次世代のためにがんばろ会」から立ち上げ、堆肥化開始時の説明だけでなく訪問指導やメンテナンスなどのフォローを定期的に行い、継続型の活動を目指している。利用者間での交流として、出来た堆肥を使った実験畑での野菜の栽培やその野菜を使った料理教室なども実施され、意見交換だけではなく楽しんで続けられる仲間作りに役立っている。さらに、ごみ問題のワークショップを開催したり、情報誌の作成・配布などの啓発活動は資源循環型社会の実現へ向けて積極的に行ってきた。実際にごみを出さない活動としては、リユース食器を貸出しごみの減量と焼却時に発生する二酸化炭素の二つを減量できる仕組みを構築している。子ども達は、他学年間交流や大人との協働活動を通し

て様々なことを学ぶ。まず地域の人々の意識の変革と持続可能な地域社会の構築を一体となつて行う活動の場を広げていきたいと考えている。そして、世代を超え交流を促進しながら次世代を育てていく。その中から、次世代の後継者が育ってくれることを願っている。

【様々な分野の人たちとの交流・連携】

発足当初から、官（八代市役所）、学（八代高専）、民（がんばろ会）が協同で立ち上げた会ではあるが、会員同士がそれぞれ繋がりお互いに活動の依頼が恙なくできている。行政においては、地元との調整や広報、活動にかかる会場の確保や書類作成手続きのアドバイスを受け、また教育機関は児童・生徒の参加の取りまとめだけでなく、先生方の専門的な知見によるアドバイスや継続的なフォローアップ研究が行われており、当会の活動をより深く専門的なものにしてきた。民間では、同じ八代地域で活動を行う様々な市民団体が川遊びや食事のサポートを担っているのだが、その場で提供される手料理は参加者の楽しみとして欠かすことのできないものになっている。地元企業からも教材素材、マンパワー、体験・展示ブースの提供等、準備からイベントの当日までサポートを得た。これらの協力を取りまとめ、かつ、事業を通して各主体を内外へアピールしていることがこれまでの協働に繋がっていると考えている。

【活動を長く継続するための秘訣】

- ・会員の得意分野を任せて、責任を持たせること。各個人を信頼して任せることで、それぞれの個性が発揮でき、場数を踏むことで成熟した人として育つ。
- ・地域の力の協調性を生かし、各自みんなが「主役」であること。人と人との繋がりを地域の繋がりにして広げて行くことが重要ではないかと思っている。
- ・他の団体との細やかな連絡と配慮、そして感謝の心を忘れないこと。頼んだことが済んだら、必ず足を運んでお礼を言うように心がけ、お互いが顔の見える関係を大切にしている。
- ・マンネリ化していきがちな活動を常に発展させワクワクする企画を行うこと。毎年同じ活動の繰り返しにはしたくないという意図から、一つのイベントを行いながら常に次回（改善点）を想定している。
- ・情報発信を常に行い、また情報収集かつ日々勉強すること。その際に会の活動内容をアピールすることはもちろん、他の協力団体もアピールしあうこと



球磨川の上流（相良南小）と下流（郡築小）の交流学習会です。水質検査・水生生物観察・川の安全教室をします。とても好評で、申し込みが多いです。

が大事。

- ・官・学・民・企業の連携を図ること。行政や学識経験者の意見を聞き、世の中の動きを常に観察すること。この連携が、活動の広がりや継続にとって最も大切だと思う。
- ・世代間交流をしながら若い世代を育てていく。若者を巻き込んだ企画・実行を進めることは地域の後継者育成にもなる。
- ・結果を重視するのではなく、それまでのプロセスと繋がりを大切にすること。反省点は次へ活かす。プラス思考で前進すること、自分から積極的に動くことを心がけている。

【活動を担う人材の育成・若者たち】

若いメンバーの中には高校生の時から参加し、大学生になったら大学会員になり、就職したら正会員になった人もいます。会員ではなくても、当日スタッフとして参加してくれればいいと考えています。スタッフとしての役割



球磨川の上流（相良南小）と下流（郡築小）の交流学習会です。

を持たせると活動も楽しく充実するし、また次回への参加に繋がることを目指す。

八代市のホームページで会の紹介・活動を見て、大学の先生から授業に使用したいと依頼があったり、その先生が学生を連れてきて活動に参加したり。さらにその学生がリピーターとなって友達と一緒に参加するなどの広がりもある。また、地内の各高校生に参加して貰うために、足で高校へ出向き依頼するが、終了後には参加高校へお礼状と参加証明証を手持ちで持参し、担当教諭の顔を見て対話することになっている。これが、次回への参加意欲に繋がっていくのだと思う。

【全国の川づくり団体へのメッセージ】

子どもたちは、きつい！汚い！危険！の3項目を体験させ達成感を得たところで、最終的に、美味しい！楽しい！可愛い！を感じさせると印象に残り「来年も行きたい」につながる。楽しいだけではダメ。楽しいだけでは続かない。活動の成果が具体的に「見える化」されないと子どもの継続は難しい。たとえば表彰であったり、認定証だったり、ホームページに写真をメインに、子どもの笑顔や感想をアピールしてあげるとそれが勲章になり子どもたちにとっての喜びや思い出になる。子どもが喜ぶ姿を見ることができ企画を考えるのが一番楽しい。常にイベントをやりながら、新しいことを3つくらい考えて次世代を担う子供たちのため、大人が率先して推進していかなければと考えている。

次世代のためにがんばる会